

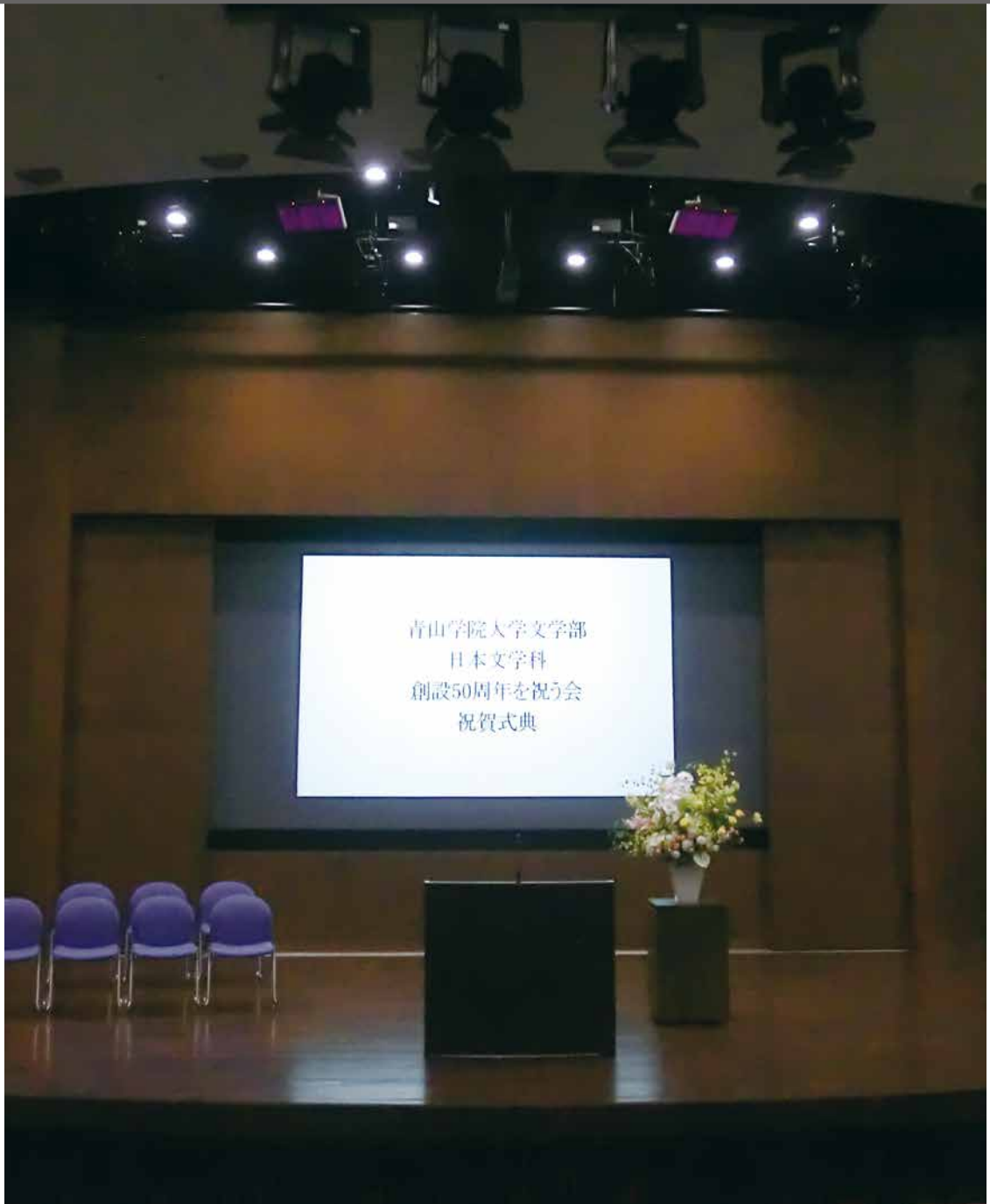
第 51 号

会報

青山学院大学
日本文学会

2017 年 3 月 17 日

(題字) 湯池 孝先生



教員生活四十年の書架

日本文学科教授 廣木 一人



棚を作ったのです。

大学院に入ったころ、家が改築された時には大工さんにこれまでのような形で、でも少し厚みのある板でしっかりとした書架を壁一面に作ってもらいました。博士課程の三年の時にある女子高校の教員となって、その学校で用意してくれた教員用の長屋に引越しました。そうなることまた、書架が必要になります。また、板を買ってきて廊下の壁なども含めて自分で棚を組み立てました。

書架というのは比喩ではありません。文字通り本を置く棚のことです。私は小中学生のころはいざ知らず、自分用の本箱というものを持った記憶がありません。大学生のころにはそれなりに本がたまっていて、それを収めておく必要があったのですが、費用とスペースの無駄を考慮して、自分で部屋の壁に本を収める棚を作りつけました。日曜大工センターへ行つて幅一五センチ、長さ一八〇センチ（二間）、厚み一センチの板を買ってきて、それを組み合わせて

して置きましたが、しだいにどうにもならなくなりました。

そんなこともあって、一五年ほど前に現在の住まいに引っ越ししました。群馬県の嬭恋村、軽井沢駅から車で三〇分のところです。ここに一六畳、二階分の高さからの片流れの書斎を作り、その半分に櫛形に書架を作りつけられました。前には十畳分の屋根付きウッドデッキがあります。どのくらいの本があるか、数えたことはありません。嬭恋村には図書館はない。軽井沢には図書室というようなものがありますが、一般書を中心としたものです。ですから、日本文学に関係する書籍はもちろん、量も我が家の方があらかも知れません。寂しいことです。軽井沢には今も多くの文学者が住んでいるのに、図書館はこのような状態で、書店は一軒もありません。ただし、立派なアウトレットはあります。

本というのは単なる物、道具ではありません。人類の足跡そのものです。ヨーロッパの王侯貴族の館には必ず図書室があつて、そこには壁一面に日本の部屋の何倍もの高さまでぎっしり革表紙の本が並べられています。そこに足を踏み入れるだけで人類の叡智や苦悩が身に迫ってき

ます。本学は、コンピュータ仕掛けで地下の本が閲覧カウンターまで届けられるという相模原キャンパスの図書館を自慢していますが、これでは図書館の役割の何分の一も果たすことができません。

私の現在の書架は安価な板で作ったもので、見た目に立派な本もありません。それでも、この書架に囲まれていると自分の人生そのものの気がしてきます。この三月で四〇年間の専任としての教員生活を閉じます。これまでも週の半分はこの嬭恋村の書斎、ウッドデッキで本を読み、原稿を書いて暮らしてきました。これからはその時間が増えます。本によつて生かされ、本によつて苦しんできた者としては、まあまああつた生活だと思つていきます。

第51号 目次

巻頭随筆	2
研究余瀆	3
日本文学会春季大会報告	5
日本文学創設五十周年によせて	6
日本文学創設五十周年 (日本文学会秋季大会)報告	7
日女生随筆	10
夏期集中講義報告	14
研究室探訪	15
修士論文中間発表報告要旨	19
二〇一六年度講義題目	21
研究室だより・編集後記	24

駄洒落と掛詞のN-gram

日本文学科教授 近藤 泰弘



日本語を研究するには「単語」の認定が重要であり、まずは単語の意味から分析を開始するのが通常だ。しかし、必ずしもそうでない場合がある。ひとつ面白い例を挙げて説明してみよう。

最近、ネットの一部で流行っている面白い遊びに「完全ダジャレ」というのがある。検索していただければいろいろ出てくるが、要するに「同じ文字列を2回繰り返し返すだけで意味のある文になる」という駄洒落である。もともと「畳文」

「畳語」と言われる言葉を繰り返す言葉遊びがあるが、その現代版だ。古来の畳文・畳語としては「布団がふっとんだ」「瓜売りが瓜売りに来て瓜売りそこね売り売り帰る瓜売りの声」などが有名などころであるが、その「完全ダジャレ」となると、例えば「ですますくちよう」を重ねて「デスマス口調で済ます区長」「이었습니다が」を重ねて「今従いましたか」のようなもので、やや高度である。学生に作らせてみると教員よりも上手だったりする。

ところで、古来の「畳文」と、「完全ダジャレ」とを比較すると、言語としての性格が少し違うことがわかる。「畳文」における「洒落」は、「うり(瓜)」「うり(売り)」「ふとん(布団)」「ふとん(吹っ飛ん)」のように、単語の切れ目の冒頭の音(「う」や「ふ」)が洒落

においても一致している。つまり、言語学的に言えば、形態素あるいは単語の切れ目が合っている。これに対して、「完全ダジャレ」では「xとうとか・さとうとうか」(佐藤、10日、砂糖、投下)のように、単語の切れ目を一致させたものも可能ではあるが、「いましたがいましましたが」(今したが)、「今したが」と「いましたが」で「従い」という単語が分割されてしまっていることがより「高度」な洒落を生むことになっていることがわかる。

このように、「駄洒落」といっても、単語や形態素の切れ目を守って音を合わせるものと、そうでないものとは分類できることがわかる。前者は単語という単位で別の同音異語にすり替えるものであり、後者は、文字列単位(つまり、音声で言えば「音節」あるいは「モーラ」の単位)での思考が要求されるものである。

近年、私どもが開発して、古典語研究に用いている、文字のN-gramを用いた研究手法は、言語の持つこのような単語にとられない自由な使われ方を分析可能な手法である。古典語の和歌の掛

詞も同類の技法であるので、文字N-gramによる分析が適している。

さて、最後に問題である。古典和歌の掛詞は、上記の洒落の分類では、単語の切れ目を守るタイプのものか、そうでないタイプのものだろうか？

私の知る限り、やはり「我が身世にふるながめせしまに」(降る⇐経る、長雨⇐眺め)のように、単語の切れ目の冒頭音が合ったタイプの洒落に限られているようである(「身を尽くし⇐滯標」「松⇐待つ」など)。もちろん、「逢坂」と「逢ふ」のように、切れ目の後半が違っているものは存在するのであるが。ただ、これは網羅的に調べた結果ではない。N-gram分析によって、古典和歌の掛詞のタイプを網羅的にコンピュータ分析が可能かどうか、今後のひとつの課題であるが、もし、冒頭音が一致することが絶対条件であるとしたら、それを用いて、古代の単語意識のようなのを探ることも可能であるはずである。

『源氏物語』を読むということ

日本文学教授 土方 洋一



易晩年の七言律詩「自嘲」の一節で、この詩は五十八歳で初めて男子を得た感慨を述べたものである。

「静カニ思ヒテ喜ブニ堪ヘノ
亦嗟（なげ）クニ堪ヘタリ」
老齢で男子を得た喜びと、その行く末を見とどけられない悲しみ、その前半は源氏の心にそぐわないものとしてカットされたのであろう。それに続けて、次の一節が来る。

「汝がちちに」とも、諫めまほしう思しけむかし。

白詩の末尾の部分、「謹ンデ頑愚ハ汝ノ爺ニ似ルコト勿レ」の引用であるが、この箇所解釈が難しい。「汝がちち」を赤児の実父柏木のことと解し、「柏木のようになるのではないよ」と訓戒していると解釈するのが主流だが、「汝がちち（爺）」を赤児の名目上の父、

即ち源氏自身ととり、「多くの罪障を重ねてきた私のようになるのではないよ」と自嘲をこめて語りかけているという解釈も棄てがたい。前者の解釈だと、源氏は柏木をいまだに許し難く思っていることになり、いささか器が小さい印象だが、後者のように解し、赤児を自分の子として受け入れ、老齢にこのような運命を受け入れざるを得ない自らの人生を苦しい思いで回想しているとすると、若き日の

様々な恋を含めたこれまでの物語をここで包摂的に受けとめるような重みのあることばともなる。さらに問題を複雑にしているのは、この条が「汝がちちに」という詩句を源氏がつぶやいたと断言する書き方にはなっていないという点である。「汝がちちに」とも、諫めまほしう思しけむかし」の「思しけむかし」は、「源氏の君はそ

うお思いになつていたことでしょうよ」という語り手の推量の形、いわゆる草子地の形をとっている。語り手は源氏の心境を忖度しているわけだが、源氏の心境を正確に把握しているかどうかは分からない。源氏にはもはや柏木を責める気持ちはなかつたにもかかわ

らず、語り手は「汝の実父、柏木のようにはなるなよ」と赤児に語りかけたいお気持ちだったにちがいないと述べているという解釈も成り立つはずである。

語り手は、作中人物の心中をすべて把握しているとは限らない。作中人物の内面に届かない、限定視点の語り手も、『源氏物語』の中には登場している。密通事件が源氏しか知らない秘密である以上、源氏の苦悩は作中人物の誰にも理解されない。それどころか、その複雑な胸中は物語を語っている語り手にさえも理解されていないとすると、源氏の絶対的な孤独さが際立ってくるように思われる。

主観性をもって語る語り手というフィルターを通して限りの語り手は作中人物の真の内面には届かない。その解釈不可能性が逆に、この物語に魅了される多くの読者を生んできたのかもしれない。

『源氏物語』の第二部、光源氏のもとに降嫁した女三の宮は、青年柏木と密通事件を惹き起こし、不注意にもそのことを源氏に知られてしまう。源氏は正妻の不始末に衝撃を受けるが、当の二人も源氏に秘密を知られたことに苦しみ、女三の宮は柏木の子を生んだあと出家し、柏木は衰弱死する。

生まれた赤児（後の薫）の五日の祝いの日、源氏は赤児を抱きつつ、「静かに思ひて嗟くに堪へたり」とつぶやく。これは、白居

日本文学会春季大会

講演・アダム・カバット先生（武蔵大学教授）

「江戸の化物と草双紙 化物はなぜ人を笑わせるのか」

報告 博士後期課程 岡島 由佳



もない大盛況で、参加者は「化物」に興味津々の様子であった。

氏のご専門は、江戸時代の化物研究である。化物とは、基本的に形のある存在と定義され、本来、人間にとって怖く不気味な存在であるが、それにもかかわらず、笑いの存在になるのはなぜなのか、これについて長年考察してきたという。

初夏の日差しがまぶしい二〇一六年五月二十一日（土）、青山学院大学日本文学会春季大会が開催された。アダム・カバット氏による、「江戸の化物と草双紙―化物はなぜ人を笑わせるのか」と題したご講演は、江戸で刊行された絵入りの読み物である草双紙、そのなかでもとりわけ黄表紙に注目し、化物との関係についてお話しくださった。当日は、立錫の余地

「ろくろ首」、「一つ目小僧」、「三つ目入道」などのように、形を表現する呼び名があり、形を与えられた化物たち。これらがなぜ笑いを生むのか。それは、人間の生活様式や人間の感情に近づいていきながらも、姿は本来の化物のままである矛盾にあるという。そこに笑いが潜んでいて、それが引き金になって笑いを誘うのだそうだ。

人間くさい化物や、人間の真似をしているのに人間にはなれない化物は、黄表紙の笑いの特色である「見立て」、「もじり」、「パロディ」、「ナンセンス」といった種類とも結びつけることができるという。具体例を提示してくださった中の一つ、「侍の行列」の絵を紹介したい。武士が槍を持って歩くのが本来の正しい姿だが、化物が首を長く伸ばして鎧のようにして歩く姿には、首を鎧に擬えた「見立て」が挿入されている。そこに「首が痛い」といったセリフが合わさることで、より滑稽さが引き出されている絵である。「見立て」の成立には、絵を見る読者の参加が必要で、定着した共通認識を介して見ること、新しいものへと生まれ変わる。化物が人間のように振る舞う姿と、興を添える文字が加わることで、より一層笑いが深まるというわけだ。私たちは、化物が人間界で日常を送り、どじを踏む姿を視覚的に捉えることで、怖いはずの化物に対して、遠い異界ではなく、身近な親しみの存在として共感するのだろう。

御伽草子『付喪神記』に「陰陽雑記云、器物百年を経て、化して

精霊を得てより、人の心を誑す、これを付喪神と号すといへり」と記されるように、付喪神は、古器物の精霊を指すが、それを可視化した絵巻には、人間へ報復しようとする古道具に目や鼻を足した姿が描かれる。鍋や釜などの所帯道具が化物に変化し、人を襲おうとするのは黄表紙にも描かれている。形・表情に面白さが備わっている。このユニークな姿は、黄表紙以前の『百鬼夜行絵巻』の中にもある。そこには、お岩がお菌黒をつける様子を覗き見る化物が描かれている。化粧をして人間的な存在になろうとする化物を、別の化物が笑うという二重構造を絵画化したもので、化物の可笑しみを含んだ眼差しは、愛らしい。

このように人間に恐怖を与える存在から人間を笑わせる滑稽な存在にもなる、両面のある化物たち。擬人化し、主体となってみせる愛嬌のある言動は、黄表紙だから笑わせるのか、それとも、化物自体に本質的に笑いが備わっているのか。化物の変遷の過程は奥深く、他のジャンルや時代との関わりなど、多角的な視点を持って深化させる契機となるご講演であった。

日本文学科創設五十周年によせて

木蓮と花水木

日本文学科教授 篠原 進



る東京の街路樹。ヤマボウシ、ヒメシヤラ、百日紅、花水木。だが、日差しの強い夏や雨の日には、こんな大きな樹の方がありがたい。

昨日の雨で落ちた銀杏ぎんなんを踏まぬよう、慎重な足どりで進むキャンパスの公孫樹並木。手入れの行き届いた花壇には、月桂樹、木槿、楓、百日紅などの記念樹。ここでも花水木が人気だ。

華やかな秋の色に彩られた木の間にひっそりと佇む、木蓮。プレートには、「日本文学科創設三〇周年記念・一九九五年一月」とある。地味な存在感は学内における日本文学科の位置のメタファーとも思えるが、木蓮の花言葉は「崇高」であることを忘れてはいけない。

副学長室はキャンパスを見下ろす八号館の二階。始業までの一時

朝の表参道駅。ハロウィーンのおレンジカラーが通りに溢れ、マックス・マラーのガラスビルに早足な人の群れが映る。どこよりも早く流行を取り入れ、めまぐるしく姿を変えながらも、落ち着きを失わない大人の街、青山。前身の「神宮前駅」も含め四〇年余り通ったこの道も、残り一年。眼に映るものすべてが新鮮で、美しい。正門近くはケヤキとプラタナスの並木。光の透過率の高さと見映えの良さから、小型化を加速させ

間余が、自由な至福の時間だ。机上にあるのは、浅田次郎の『帰郷』（集英社・二〇一六年六月刊）。日本文学科創設五〇周年特別講演（九月二二日）の記念品でもある。「小説すばる」連載の六編を収録した該書は、戦争を知らない世代が描く戦争文学。どれもガリィダブルな短編集の白眉は、表題にもなっている「帰郷」だ。一読しやすく感じた、既視感。

ベストセラーの水脈を七種に分けたのは見田宗介であるが、その骨子は半世紀以上を経た今も生きている。白血病などの難病型（世界の中心で愛を叫ぶ。最近では、君の臍臓をたべたい）、過去隠蔽型（砂の器、同・氷の轍）、対照的な二人の入れ替わり型（王子と乞食、同・新海誠・君の名は。）等々。手練れの作者はそうしたピースを自在に組み合わせ物語を織り上げる。

その例でいけば、本書はさしずめフランスのマルタンゲール型。失踪した男の帰還と、贖マルタンの出現。テニアン島で戦死と伝えられた古越庄一。松本に帰郷した彼を待ち受ける、哀しい現実。愛

する妻は既に弟と再婚しており、自分の居場所はどこにもないのだ。

読者の心をとらえる、小説のツボ。西鶴は微妙に設定を変えながら、それを反復していた。漁師の遭難（『懐硯』「案内知つて昔の寝所」）、失踪（同「佛の似せ男」）、仮死（同「後家にならねばならず」）、最上川での水難（『万の文反古』「南部の人が見たまこと」と）。

不在という装置が照射する、人間の裏面と存在論的意味。西鶴が用意した結末は、死と出家。だが、浅田は傷心の主人公に心優しいホステスとの未来を準備する。

学生時代に定位置だった窓際の席には今、スマートフォンを手に洗練された装いの学生が座る。自分の居場所はない。半世紀に亘る日文の歴史上では、私たちの四年間はちっぽけな点ドットに過ぎない。でもそのドットは豊かな表情や崇高さを備えたものであることを、白い木蓮が教えてくれる。

始業のチャイムと同時に、一報が届く。『帰郷』が大佛次郎賞をとりそうだ」と。

日本文学創設五十周年記念大会(日本文学会秋季大会)報告

講演・浅田次郎先生(作家・日本ペンクラブ会長)

「小説の過去、現在、未来」

報告 博士後期課程 安藤 優一



二〇一六年九月二二日、日本文学創設五〇周年を祝う会が開催された。記念講演では『小説の過去、現在、未来』と題して作家・日本ペンクラブ会長の浅田次郎氏が登壇された。

冒頭、浅田氏は自作と外国とのかかわりから話を始めた。今ではライフワークとなった『蒼穹の昴』に始まる中国を舞台としたシリーズもあり、取材のため外国を訪れることも多いとい

う。「外国文学」と「日本文学」との違いを一つ挙げるなら、それは「思想性の有無」になるのではないかと指摘された。西洋の文学では哲学・宗教をはじめとする思想性を背景に持つ作品が多いのに対し、日本の文学は必ずしも思想性がなくとも成立しうる点で希有である。これは個性でもあり時に無節操とも批判される。その「戦犯」として鴨長明と藤原定家を挙げ、両者とも当時にあって戦乱や社会状況から背を向けるかのような内容の作品を残したとユーモアを交えて語った。社会的隠遁として「ある意味でもっとも小説家として正しいスタイル」とも指摘し、そうしたイメージが作家の神秘性を醸成して売り上げにも結びついていくのだと、作家のイメージ

を戦略にも引きつけて語ると、会場は笑いに包まれた。明治以降の急激な近代化の中で文学はどのように変わっていったのか——この問題について、浅田氏は自然主義文学に対する自身の見解を披露した。最近、ゾラの作品を新訳で読み直したことに触れて、自家の自然主義がキリスト教の呪縛から解放された場所での文学を目指したのだとしたら、日本にはもともとよりそうした束縛はなかったのではないかとの見立てを示した。本来の意味付けを離れた日本の自然主義の行き着いた先が、つまるところ田山花袋の作品のごとく「蒲団に突っ伏して泣くしかなかった」という場面であった。その上で花袋は、むしろ束縛を越えたところに彼なりの「自然」を見出した作家ではなかったかとも指摘し、その意味では当時の日本の作家の中では自然主義をもっとも理解していた一人であったとされた。

日本近代文学の中では、ストーリーの語りに惹き込んで読ませる谷崎潤一郎を「小説の天才」と直截に評した。作家となる以前、

自衛隊入隊のきっかけともなった三島由紀夫の存在にも触れ、三島は谷崎以上の耽美派として「美そのもの」を描くような小説を目指したと述べた。それは同時に、物語から逸脱していく破滅的な予感をはらんだ道筋であったという。

純文学と大衆文学という区分をしたことは近代日本文学の大きな過ちであったという浅田氏は「芸術は常に大衆ともになければならない。文学を志す人は区分けに捉われない」と述べた。終わりにあたり「小説を通じて今の時代の作品だけではなく、ぜひ古典をたどってみてほしい」との言葉を会場の学生に向けて送った。

講演後には会場を代表して三名の学生との質疑応答が行われた。以下にその概略を紹介しておく。

——作品には折に触れて戦争のことが登場する。文学と戦争とのかかわりについて。

まず「伝えなければ」という使命感がある。近年、集英社の『コレクション戦争と文学』シリーズで編集委員を務め、戦争文学の

持つ価値に改めて気づかされた。宗教的対立はないが内面の苦悩というものが日本文学にはある。これは戦争文学が書かれる上できわめて重要な要素と考える。

——『王妃の館』などをはじめとして群像劇も多く手掛けている。そうした作品を書くことについて。

登場人物が三人以上になると描き分けは途端に難しくなる。しかし、難しいからこそ書きたいという動機がある。『王妃の館』の執筆にあたっては、パリのホテルに滞在した際、外出先から戻ると誰かがいた形跡があり、そこから物語の着想が生まれた。

——近作『わが心のジェニファー』ではアメリカ人の語りを通して日本の文化や社会が描かれた。外国から見た「日本」について。

ペンクラブの仕事を通して外国の作家たちから様々な質問を受けることがあるが、これがとても面白い着眼点で小説を書く上での活力にもなっている。

ここにその質疑の模様を生き生きと再現することは叶わなかったが、浅田氏の軽妙な語り

口のもと縦横に引き出される話題の数々に惹き込まれ、そして折々に挿まれるユーモアに会場は大いに沸いた。質疑に至るまで真摯にご対応いただけただけなこと、この場をかりて深く御礼申し上げます。

祝う会を終えて

報告 博士後期課程 武居 辰幸

去る九月二十二日、本田国際記念会議場（十七号館六階）にて、日本文学科創設五十周年を祝う会が催された。

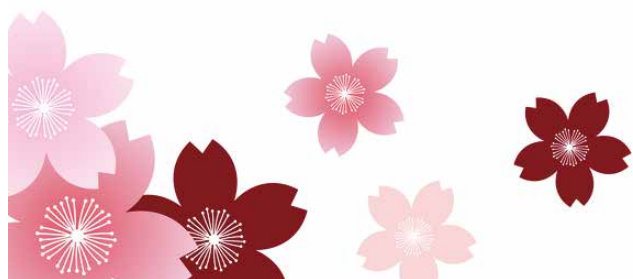
この日を迎えるにあたり、私は日本文学科の学生代表として、そして、副実行委員長として、祝う会の実行委員会に参画させていただいた。同窓生の方々との一回目の集まりが催された三月のある日、諸先輩方と初めてお会いした。右も左も分からない私に、先輩方が優しく接して下さったことで緊張の糸がほぐれた。

それからは、毎月一回のペースで実行委員会が開催され、日本文学科の教授や同窓会のメンバー、今回の祝う会にむけて実行委員を引き受けて下さった歴代の卒業生の皆さま、そして日文委員会から選ばれた学生で組閣され、総勢九十八名の大所帯となった。

祝う会は、祝賀式典、日本ペンクラブ会長・浅田次郎氏による記

念講演、卒業生と在校生が語り合うシンポジウムという三部から構成することとなり、祝賀式典担当講演会とシンポジウムを計画する記念イベント担当、動員や案内の制作といった、いくつかのチームに分かれての話し合いがもたれた。その中で、私は記念イベントのシンポジウムチームに属し、当日登壇することとなった。実行委員会での話し合いは多岐に渡り、チーム間でも相互に協力し、一つ一つ着実に、幾度も話し合いを重ねて細部まで綿密に計画されていた。月一回の実行委員会の合間には、頻繁にメールでのやりとりが行われ、さまざまな情報交換がなされた。

そして当日を迎えたが、この日は朝からあいにくの雨であった。私は大学へ向かう路で、もしこの雨で人が集まらなかつたら、と少し不安になった。しかし、すぐにその心配が無用であることを知る。





大学構内には開場する前から、たくさんの卒業生の姿が見られた。

実行委員会のメンバーは、午前中から集合し、タイムスケジュールの確認やリハーサル、最終打合せを行い、本番に臨んだ。

祝賀式典は、小松靖彦先生の開式の辞に始まり、祈禱、佐藤泉先

生の式辞、理事長・学長・院長の祝辞が続いた。そして、祝う会名誉会長をお引き受け下さった武藤元昭名誉教授がお言葉を述べられ、片山宏行先生の閉式の辞で終わった。

十分間の休憩を挟み、「小説の過去、現在、未来」と題した浅田次郎氏の記念講演が行われ、四十五分ほどのお話ののち、本学学生による質疑応答があった。

祝賀式典、浅田氏の講演会と進むにつれて、客席は

埋まっていき、遂には会場内に入りきれないほどで、急遽受付前にモニターと椅子を設置して対応するほどであった。それに続く、卒業生と現役学生とのシンポジウムには、当日飛び入りで登壇してくださった方もおり、和やかな雰囲気のもと、次々に質問も出て、各

界で活躍する卒業生の方々からさまざまなお話を伺うことができた。こうして約二時間半の祝う会は閉幕し、大変な盛況ぶりであった。普段の大学生活では、卒業生の方々とお会いすることや、座をともにしてお話することはなかなかできないため、シンポジウムという試みは大変貴重な機会であったと思う。

私は、祝う会にむけた実行委員会において、副実行委員長を仰せつかったものの、はたしてそれに見合うだけの働きができたのか、はなはだ疑わしい。しかし、歴代の日文卒業生の先輩方に助けていただいたことで、なんとかその役目を果たせたかと思う。改めてこの場をお借りして、御礼を申し上げます。

今回の祝う会に参画させていただいたことで、たくさんの日本文学科の先輩方と出会うことができ、さまざまなお話を伺うことができ、もしかしたら、今回のような機会でもなければ、卒業生の皆さまとは出会うこともお話しすることもできなかつたかもしれない。また、実行委員として、話し合いの場に加わせていただいたこと

や、イベントの考案・企画から準備といった話し合いの場に携われたことは、非常に貴重な経験となった。そして、その場をとおして、日本文学科の卒業生が、今なお、学舎である青山学院大学、そして、日本文学科を愛していることを実感した。実行委員一人一人が意欲的に望み、精一杯努力し、それぞれのチームごとに連携を図ったことが、祝う会の盛会につながったのはいうまでもない。

次の節目となるのは、日本文学科創設六十周年である。十年後にも、歴代の卒業生とともに次代を担う後輩たちが手を取り合い、我々が日文の還暦祝いが盛大に行われるに違いない。そのときに私は、会場の片隅から温かく見守りたい。



日女生随筆

「大学院に進学して」

博士前期課程1年 入江 祐子

「私が大学院進学を志したのは二〇一五年夏のことです。卒業後長い時間が経っていました。学部時代ご指導いただいた土方先生に相談にあげり、思いきって社会人入試に挑戦しました。

学生時代から「いつかは大学院へ」と希望を抱いていたのですが、社会に出て、結婚もし、様々なイベントを通過する歳月は怒涛のように慌ただしく、卒業論文の追い込みに夢中だったあの冬は、今も昨日の日のことのようにですが、随分昔となつてしまいました。日々の生活の中、私は「いつか」は待つても永久に來ないのだと悟つたのです。大人は誰しも進学に限らず何かを始める時、全ての条件が整い、障害がゼロになるのはごく稀ではないでしょうか？ 私達は仕事や家族、時間的経済的制約、多くの

しがらみの中で生活しています。そして「いつか」を待つうち、五年、十年は飛ぶように過ぎてしまいます。私は、まず進学への挑戦とスタートに踏み切ることにしました。失敗や障害は直面してから対処しよう、社会人としての日々は、様々な困難の経験、耐性、そして柔軟な対処の知恵を培ってくれたと期待しつつ。幸運にも合格をいただき、本当に嬉しく、感謝の気持ちでいっぱいです。

さて、私の学びは、「大学院」とはどのようなものか把握することから始まりました。大学院での学びの価値は、存外現在の学部生にも見えづらいいのではないのでしょうか？ 具体的には必要単位数があり、大学院独自の授業があり、多くはゼミ形式で、発表に追われる日々となります。そして常に論文を書く準備をし、修士論文を指して学んでいくのです。

早くも入学して半年がたちました。職業を持ちつつ時間も限られ、ブランクでもともと乏しい知識も記憶も薄れ（卒業論文は手書きが主流の時代の学生です）、予想通り、高いレベルで学ぶ困難さを感じています。若者と違い、未来の

展望は見えづらく、今自分が日本文学を研究する意味をいかに見出すか、日々考えています。しかし、好きなことを勉強できる日々は、こよなく幸せです。多くの人々が学生時代に「もつと勉強すればよかった」という未練を残す中、せっかく学生生活を再開するという幸運を得たのですから、皆さんが将来の選択肢を思う時「あんな人もいた」と一つの参考例ともしてもらえるように、大学院での学びを全うしたいと思っています。

就活体験記

4 D 松浦 志歩

私の就職活動に対する態度は、決して良いものではなかった。就職するならば、出版関係が良いと考えてはいたが、はじめは考えているだけで何もしないまま時間が過ぎた。夏のインターンシップが重要と聞いてはいたが、参加しなかった。こんな尻の重い私が、それでも、このように就職活動体験記を書かせていただくことが出来るのは、部活の先輩方、キャリアセンターの方々、訪問させていた

だいた社会人の方々、部活の同期や就職活動を通して知り合った友人など数え切れない人たちのおかげであると思う。

三月からエントリースタート、六月から選考開始になったが、自分の準備不足を痛感する毎日だった。一社のESを書くのに何日もかかり、三月末になりようやく筆記試験の勉強を始め、グループディスカッションは落ちまくり、面接では上手く喋れない。そんな自分が嫌になることもあったが、そんな時、青山キャンパスは実に良い場所にあると改めて感じた。落ち込んだ面接帰り、だいたい電車は渋谷が表参道を通るので、私は下車し、青山キャンパス七号館の部屋に吸い込まれていく。すると、スーツを着た部活の同期がすでにいて、「今日の就活はこんなだった」「明日はどこそこに行く」「自己PRでは、こういうことを話しているのだ」などあれこれ話しているのに加わった。人に話すことで、落ち込んだ気持ちも軽くなった。

就職活動が終わった今ふり返ると、私の就職活動は恐ろしく要領の悪いものであった。あらゆるこ

とに準備不足であり、エントリーした企業も少なく、当時は出版業界でやりたいことも曖昧で、失敗談ならいくらでも話せる程だ。しかし、運良く志望していた業界で内定をいただくことができた。

就職活動は、上手くいくことよりも上手くいかないことが圧倒的に多く、落ち込むことも多いだろう。しかし、反省しつつも気持ちを切り替えて一社一社を大事にして受けていくことが大切であると思う。また、就職活動は社会人、先輩、友人から様々な話を聞いて、話して、刺激を受ける良い機会だった。これがあつたから、就職活動が楽しく思えたのだろう。たくさん動いて考えて、また動いて、得られたことは数え切れない。

教育実習体験記

4 B 本田 恵

私は幼いころから、教師になるのが夢だった。自分の言葉で、文学や言葉を学ぶことの楽しさをたくさんの人に伝えてみたい。これからの社会を動かしていく人に、

日本文学や日本語への関心と誇りをもってほしい。そのような思いで、教師になるための第一歩である教育実習に向かった。

三週間の教育実習では、芥川龍之介の『羅生門』を題材に授業をするほか、先生方の授業を見学させていったり、学級活動の時間に行なわれるビブリオバトルに参加したり、進路指導の一環として受験や大学生活のことを生徒の前で話したりと、様々な経験をさせていったり。また、学校説明会のための会場準備、配布物の仕分け作業、清掃活動などにも携わることができ、生徒と直接関わることはなくても学校を運営するために必要な業務はたくさんあるのだ、ということを知る良い経験となった。先生方のご指導・ご配慮と、楽しくてたくましい生徒のおかげで、とても充実した時間を過ごすことができた。

以上のような経験を通じて、教師という仕事の多忙さを実感するとともに、学んだことが二つある。ひとつは、学校で行う全ての活動こそ教育であるということだ。私は文学や言葉に対する情熱をもった教師を志し、授業ばかりに一生

懸命になろうとしていたが、学校教育というのは授業が全てではない。学校という集団生活の中での様々な活動を通じて、生徒自身が成長できるための環境をつくっていくことも、教師の大切な仕事なのである。もうひとつは、周囲の人に感謝の気持ちをもつことだ。ご多忙のなか親身になって指導してくださった先生方や、拙い授業にも一生懸命に参加してくれる生徒が居てこそ、私の教育実習は充実したものになった。厳しく指導されれば悔しいし、生徒と分かり合えないときは悲しくなるが、それらも全て私自身が成長するため大切な通過点となった。毎日たくさん経験と成長の機会を与えてくれた先生方と生徒、辛さを乗り越える強さをくれた同期の教育実習生には、伝えきれないほどの感謝の気持ちでいっぱいである。

また、教育の在り方そのものに対する疑問も生じた。時代の変化に伴って、教育も変わっていかねればならないと私は思う。これからの社会を動かす力になる生徒に対して、教師としてどのような教育をしていくべきなのか。学校教育の「あたりまえ」になっている

ことが、生徒にとって本当によいものと言えるのかどうか。教育の在り方を常に考え、よりよいものへと変えていけるような教師になる、という今後の自身の課題を発見することができた。

教育実習は、人生に二度とない貴重な経験になった。ここでの学びと課題を忘れず、教育と真剣に向き合う教師になりたいと思う。

介護体験記

3 C 上谷 健太

地元の特別養護老人ホームで、五日間の介護体験をしました。この介護体験は、教員免許取得のために行われるものです。この記事をお読みのみなさんの中には「教員免許取得のためになぜ介護体験をする必要があるのだろうか」と疑問に思った方もいらっしゃるかもしれません。私も介護体験に行く前にはそのような考えを抱えておりました。しかし、あるできごとを通して考えが変わることとなりました。

体験三日目、私は上田さん(仮称)という女性利用者の方の担当

になったのですが、円滑なコミュニケーションをとることができず、ご自分を害してしまいました。どうすることもできずただ途方に暮れる私に、指導役であるベテラン介護福祉士の方が次のような言葉をかけてくださったのです。

「利用者の方と上手くコミュニケーションをとるためには、その人が今までどのような人生を歩んできたのかということや、その人の性格や価値観を知ることが必要なんだよね」

まず相手を知り、理解すること。その基本的な段階を踏まずに、「コミュニケーションをとらなければならぬ」と私は力んでいたのだと気づかされました。以降私は、上田さんのことを知り、理解するように努めました。すると、次第にコミュニケーションを上手くとれるようになり、上田さんも少しずつ笑顔を見せてくださるようになりました。

相手を知り、理解する姿勢というのは、介護の現場のみならず、教育の現場でも求められるものであるのではないだろうか。生徒のことを深く知り、理解すること

は、円滑なコミュニケーションととり、信頼関係を築く上で極めて重要であると思われれます。そうした他者との関わり方を学ぶという点において、介護体験は大変意義のあるものであったと私は感じています。四年次に行われる教育実習、ひいては将来教壇に立った際にこの介護体験で学んだことを活かしていきたいと思っています。

グローバルな

国語科への挑戦

2C 朝山 麻衣子

大学での文学系の学問を虐げるような意見が出されている。私はこのような意見について、日本文学科に在籍する者としてしばしば考える。自分がなぜ日本文学あるいは日本語学を学んでいるのか自問する。その答えの一つとして考えたことを紹介したい。

教職科目を受講していると、国語科は生徒にとってどのような役に立つのかと考えてしまう。私は、中学高校の国語の授業をきっかけに日本文学や日本語学に興味を持ち、それを専門的に学ぶ進路を選

んだわけだが、日本文学に興味を持ってなかった生徒は、国語の授業はいったい何のためになるのかと思うのではないか。どうしたら国語の授業により意味を持たせることができるだろうか。

「国語」とはいえ、そのクラスは必ずしも日本のアイデンティティーを持つ生徒ばかりではないと思う。私の今までのクラスメイトには、韓国、中国、フィリピンなどの国籍を持つ生徒がいた。また、ハーフの生徒にとっては日本人でない親の文化的背景を無視できないだろうし、親の仕事で海外にいた生徒であってもそのアイデンティティーは日本だけではないだろう。また、ある学校ではクラスの半分の生徒が日本以外の国籍を持っていると聞いたことがある。

このような、日本とは異なったアイデンティティーを持つ生徒にどのようにして国語教育を行っていくべきか。さらに、これから日本でも難民の受け入れ体制が整っていったり、ますますグローバル化が進んだりしていく中で、異文化を受け入れる風潮が高まると同時に、人々は必ず「日本」につい

て見直し振り返る必要が出てくるだろう。

半期だけではあったが日本文学科の「文学交流入門」の授業を通して、今まで私が中学高校で受けてきた、ただ文学作品を読んだり鑑賞したりするだけの国語の授業ではいけないと感じ、その改善のためのヒントが得られた。様々なアイデンティティーをもつ生徒たちにどのように日本の文学を紹介していったらいいのか、また授業から生徒たちが得られるものは何かといったことが今後の国語科の授業の課題になってくると考える。

東京の渋谷に毎日通い、さまざまな地域から来た観光客や留学生などを意識し交流していると実感しづらいが、「島国根性」などと形容されることもある日本人の、外国人だと思わず敬遠する態度は根強く、まだまだ異文化交流のハードルは高い。小学校の同級生で母親がフィリピン人であるというだけでいじめられていたクラスメイトがいたことを覚えている。また韓国人の知人に「日本人は欧米人には友好的だけど、同じアジア人の韓国人や中国人には冷たい

のはなぜ？」と聞かれた時は少なからず心当たりがあったので衝撃を受けた。韓国ドラマやK-POPが今では一つのジャンルとして定着しているのは間違いないが、欧米人の人形のような容姿とスタイルに憧れ、根拠のない敬意を持つ意識は変わらないようだ。このような無意識に根付いている良くも悪くもある心理を、国語の授業を通して見直すきっかけにできないか。

まず中学から習う漢文と古文であるが、奈良時代から深いつながりのある二つを全く別々に扱っているのは理にかなっていない。漢文と言えば「中国の古典」として授業で取り上げられているが、かつての日本人は漢文を嗜むだけでなくそれを自在に操って他国との交流を行ったり自己表現の道具にしたりしてきた。そこで中国人の作品だけでなく日本人の漢詩を取りあげてみることで、漢文や中国文化をより近いものとして捉えられるようになるのではないか。また古文の側から見ても、清少納言の『枕草子』には彼女の漢文の知識がたびたび披露されている。日本の有名な歌人たちには中国に

渡った人もいる。中国人が詠んだ漢詩が日本的に解釈され取り入れられてきた様子を知れば、国家間の印象から疎んじがちな中国人への固定観念を見直すきっかけになるだろう。

そして、近代文学の学習こそ絶好の文学交流のチャンスであると思う。夏目漱石はイギリスに、森鷗外はドイツに留学していたし、谷崎潤一郎や川端康成、村上春樹などの作品も様々な言語に翻訳されている。作品から著者の留学経験の痕跡を探すのもいいし、外国語にどのように訳されているのか比較してみるのも面白い。

さらに、ビブリオバトルで外国のアイデンティティーを持つ生徒に他国の文学を紹介してもらう機会をつくることも国語科として可能ではないか。子供の頃に読んでもらった本や他国で人気の日本の文学などを日本語で紹介し表現することは立派な国語科の授業内容である。本を通して興味を持つことができれば、偏見やいじめも少なくなるのではないか。

こうしてみると、今までの国語教育が日本国内に限定された視点だったことを改めて感じた。実際

このような授業をするには時間がなかつたり受験対策に追われてしまつたり難しい部分もあるだろうが、教師自らがグローバルな視点で文学を見つめていれば、生徒にも自ずと伝わるのではないか。国語科は自国を知って国民の意識を高めたり、海外に発信できるだけの知識を身に着けたりするだけではもう足りないのだ。これから、新たに日本文学から世界が見えてくるような視点が必要だと考える。

国際交流というと、日本と他国との相違点を見つけてそこに今までに経験したことのない魅力を感じたり、異なった文化をそのまま受け止めたりすることだと思っていた。だから日本に住む外国人も日本のアイデンティティーを持つような国語教育を行う必要がある、という考えだった。しかし、文学交流をはじめとした交流は誤解、つまり自分なりの解釈から生まれるものもある。他国の文学に触れるとき「やつぱり自分たちとは違うね」で終わってはいけない。共感できることや真似してみたいところを見つけ、その解釈がオリジナルと違ってても自分流に

受け止め、そこから新たなものを創っていくのが文学交流である。

そして、国語の授業は、日本の生徒が文学を通して他国の文化が日本流に受け取られていった過程を学び、外国をまよもよと近しく思えるような、そして外国のアイデンティティーを持つ生徒には、自分流の日本の文化の共通点や興味を見つけてもらえるような場にした。国語科を、英語科のように国際交流の糧になる科目にした。日本文学を日本の中だけで捉えるのではなく、もっとグローバルな視点で捉えていく姿勢が広まったら、社会の中での需要も大きくなるのではないか。



夏期集中講義報告

(日本文学特講A)



2C 宮本 史穂

今年度の夏期集中講義(日本文学特講A)では、カリフォルニア州立大学サンタバーバラ校で日本史を教えているルーク・ロバーツ先生をお迎えして、「日本近世の

政治思想と生活文化」について学びました。四日間の講義で前半は「政治思想」、後半は「個人史による生活文化」について論文や資料をもとにして主に江戸時代から明治初期にかけての日本についてみていきました。

前半の「政治思想」については「地方からの視点」をテーマに、先生が研究している土佐を中心にした当時の政治について考えるという内容でした。日本史として知られている日本の過去は中央からの視点であることが多く、必ずしも日本の全体の姿ではない、そのため地方からの視点で見て考えることが必要という事でした。はじめに、地方の文献を読むにあたって歴史用語について気をつけなくてはいけない事が多くあります。例えば「国」という言葉は現在では当たり前前に日本全体をさす言葉ですが、当時の百姓にとっては自分の暮らす領地(土佐藩など)の

事をさす言葉になります。他にも幕府、朝廷、天皇、藩なども今知られている使われ方とは違う意味で使われていることがあるそうです。次に政治について土佐藩訴状(目安)箱というものから見ていきました。藩内の政治について民衆から意見を求めるため一六三六年ごろから多くの藩で訴状箱が置かれたそうです。その中で土佐のある商人の意見を読みました。そこには主に藩内の財政について率直な意見が書いてありました。わたしは武士ではない人々が藩の政治に意見を出す事に驚きました。ただの領民でも自分の生活に関する政治には詳しく意見している例が多かったそうです。

今回は土佐藩についてのみでしたが、当時の日本の暮らしぶりや政治を資料から実際に見ることができました。

後半の個人史については江戸時代の武家、森家の家系図や武家の女手島しようが起こした事件の史料から当時の武士の家の女性について、川越の商人の榎本弥左衛門の覚書を読み、商人の生活について学びました。ここでは一つの家や個人など小さなものから歴史を

考える「マイクロヒストリー」という方法を学びました。森家と手島しようの史料からは、江戸時代の武家はやはり女性が男性より下に見られており、男が家を守るという考えが強く見られました。川越商人榎本弥左衛門の覚書は彼の心情が書かれており、商人の武士への憧れや、家に対する考えなどを読むことができました。周囲に認められたいという気持ちや、彼の考えだした頭を冷やす方法は共感出来て、とても面白かったです。

四日間の講義を通して、マイクロヒストリーという考え方を初めて知りました。土佐の目安箱の意見や江戸時代の小さな事件の記録、一人の商人の手帳などほとんど見る機会がないであろう物を読んで、彼らの生活を考えるのは興味深かったです。江戸時代の人々に対して持っていたイメージとは違う事があったり、現代の人達と同じところがあったり、昔の人や生活がとても身近に感じられました。授業で取り扱った史料は、江戸時代のもので多く漢文風で読みにくく大変でしたが、非常に貴重な経験が出来ました。文学研究にも活かせるといいなと思います。

研究室探訪

山下先生編



★早速ですが先生は研究室にどのくらいいらっしゃるのですか？

家で全部仕事するので、授業とか会議とか用事がないと基本的に研究室には来ません。ですから、少ないときは週に二日、授業のときだけで、多いときは四、五日来ています。学生が面談とか私に用事があるときは、必ず約束をして来てもらっています。大学に来ているときも用事がないとあまり研究室

にいません。

★本がたくさん並んでいます、この研究室にはどのくらい置いてありますか？

基本、家で仕事をするのでよく使う本や本当に重要な本は家に置いているので、ここにはあまり多くないと思います。雑誌とか、家に置けないような文学全集とか、分野も色々ですが、一五〇〇冊くらいでしょうか。研究分野の日本



語学のもの少ないですが、日本語学習の教科書類は新しいものを常にここに置いてあります。

★今、特に研究していらっしゃる事はありますか？

日本語学はずっと前から変わらないのですが、語構成について研究しています。合成語、主に派生語についてやっています。その中でも接辞のことをやっています、漢語の接尾辞について特に研究しています。「〇〇的」「〇〇風」「〇〇性」とか「化」「系」「派」様々あります。これらは意味用法は違いますが、多くは多義です。また、それぞれがどういう語基

につくのかという傾向についても調べています。また、皆が臨時的に語に接尾辞をつけて造語した言葉についても調べています。例えば、夜室内で吸えないのでベランダに出て煙草を吸っている喫煙者を「ホテル族」と言うことがあります。「ホテル族」はある程度世間一般に周知されていますが、個人が自由に言葉を

造ることもでき、世の中には色々な「族」があります。調べると本当に様々出てきて面白いのですが、やっぱり傾向があるんです。この前は、この「族」の傾向について書きました。今、新たに接頭辞について始めています。「超」が有名だと思いますが、「爆買い」「爆食い」などの「爆」が最近多用されていますよね。流行語とも関係していて、色々な人が臨時的に造る言葉ではありませんが、無秩序に造るのではなく、やはりルールがあります。それは今までの造語のルールに大体合うような形で造ることが多いのです。

日本語教育学の方は、語彙指導について研究しています。もう一つの研究である語構成の知識に基づいて、語彙を体系的に学ぶ方法について考えています。日本語の研究と日本語教育の研究とを関連づけるように取り組んでいます。

★研究室に貴重な本や思い入れのある本はありますか？

研究と全く関係ないものになってしまいましたが、佐多稲子の全集です。これは買って四〇年以上経つので日に焼けてしまっています……。私は大学で近代文学を専



攻めていて、この佐多稲子について卒論を書きました。佐多稲子は、プロレタリア文学の作家で、主に戦前戦中の作品を取りあげたのですが、当時、全集の出ていない作家を卒論のテーマにするのは良しとされていませんでした。けれども私は佐多稲子に非常に興味があつたので全集が出る前にテーマにしたんですね。ただ、全集がないので本を集めるのが大変でした。

自分で古本屋を回って単行本を集めました。全ての作品をそろえることはとてもできませんでした。そうしたら、卒業して少し経った頃に佐多稲子の全集が出て、卒業論文書いているときにこれがあったら面白いぶん楽だったのにと考えた思い出があります。それが最近になって中国の日本語の教科書で佐多稲子の作品が扱われ

ていると聞きました。それについて研究している人もいるそうです。プロレタリア文学から出発している作家なので初期の作品には一九二〇年ごろの貧しい若い都市労働者を題材にした短編が多いのです。今の中国の方が共感できるというのはいわゆるですが、登場人物たちが話す言葉が今とだいぶ異なっているのです。その点は興味深いのですが、気になります。でも、今の若い日本人にも読んでもらいたいと思います。今また六人に一人の子どもが貧困におかれており子どもの貧困が問題になってきています。九〇年前の貧困とは質が違うと思いますが日本でも貧困は他人事ではなくなってきたので、こうした文学作品を通して実状を知ることが大切だと思います。

★研究室の便利な点又は不便な点
はありますか？

十一階にありますが高いいところは好きですし、エレベーターの前から東京タワーも見えて眺望がよく、気に入っています。また、以前同じ建物の八階にいたときは本棚が片側にしかなかったのですが、今両側についているので余裕

ができました。他の先生は棚が足りないとおっしゃいますが、私は研究室においている本がそもそも多くないので問題ないです。ただ、授業をするのにスペースがないのは少し残念です。大学院の授業で学生が二人の時とか面談の時とかに限られてしまいます。あと、相模原キャンパスにいたこともあるのですが、そこは広い研究室でそこに置いていたソファが、今スペースをだいぶ取ってしまっています。

★山下先生はなぜ日本語教育を研究されるようになったのでしょうか？

大学を出て日本語教師になってから勉強不足を感じて、大学院に入り日本語を勉強、研究し始めました。以前は日本語教育を学べる大学がありませんでした。大学院では言語そのものを勉強しようと日本語学を専攻しました。ですの、日本語教育学を専門に学んだわけではありません。けれど、なぜ日本語教師になったのかと言うと、大学の後の進路を決めるときに、日本文学を研究していたこと、中国語など言語に興味があったことから自分が関心のあることを職

業にできないか考えた結果、中国の人に日本語を教えればいいんだということに思い至ったのがきっかけです。日本語教師養成学校で少し勉強しただけで教えることになりました。日本語教師を知ったのは大学一、二年生ぐらいでしたが、それから教師になったのはだいぶ経って三十代でした。ほどなく、念願かなって中国で医学、薬学の専門家に日本語を指導する機会を得ることができました。

★今の青学生にメッセージ

若い人には外に目を向けてほしいですね。それは、海外旅行や留学などお金のかかることだけではありません。普段自分がいるところから出てみて、いつもと違う新しい人に出会ってみたり、そこから新しいことを知ったりすることが、とても大切だと思います。私は学生のころ、行こうと思えば行けたのに海外に行くこともなく、その気持ちも持たず、時間が経ってから何であの頃いろいろ経験しておかなかつたんだろうと後悔しました。皆さんには内にこもらずどんどん外に出て、学生のうちにいろんなことを吸収して行ってほしいですね。

小松先生編



★まず手始めに研究室にはどのくらいの頻度でいらっしゃいますか？

基本的には授業やゼミ、それに会議などで週に三日ほど在室していることが多いです。曜日は年ごとに若干変動がありますが、本年度は月・水・金でした。ただ行事等があれば土曜日にも来ています。

★先生のご専門となさっている分野について教えて下さい。

一口に『萬葉集』と言っても様々な切り口があります。昨今メインとしているのは戦争下での受容のあり方と、「書物」としての復元

です。前者はなぜ戦争の時代に『萬葉集』が読まれたか、それは政府と軍による政治利用だけであったか、後者は原本の姿はどのようなものであったかといういくつかの問いを軸に探っています。

他に『萬葉集』以外、あるいは派生したところでアジアなどの非西洋世界の詩歌に見られる自然観について、それと新たな文学の誕生は異文化に根差した作品同士の出会いから、と捉える文学交流の研究を進めています。

また今のところ講義や研究として形にはしていませんが、口承文芸や身体表現といった、文字での記述に依らない分野にも興味を持っています。というのも学生の時分に民俗芸能への関心を抱き、神話に主題を取った神楽を十年ほど演じていたからです。例えば有名な素戔嗚尊（すさのおのみこと）が暴れて秩序を乱したり、手力男命（たちからのおのみこと）が天岩戸を開けようとしたりする場面ですとかね。

当時は型や謂われだけでなく、生の美しさ、身体表現ならではのありようが知りたくて舞踊の本を読み漁りました。研究室の書架上

は今でもその名残があります。そういうえば復元した平安時代の楽曲、催馬楽を学生に唄ってもらった。また今度その辺りのテーマでやつても良いかも知れませんが。

います。ここに並んでいるのは大型本や『萬葉集』周辺領域の書道・文書の歴史、あるいは一般的な思想関連の図書が中心です。他には源氏や鵜外も。付箋を貼る他に書き込み癖がありまして文庫本などは貸すと驚かれることも多々あります。

★では本棚や部屋のレイアウトに何か拘りはありますか？

かといって綴じられた紙の資料に限りません。書誌学の範疇ですから装幀に係るものもありますよ。

正直に言えば配置に凝っているというところはありません。あえて挙げるなら、出入り口を背にして向かって左手に専門書籍、右手に雑誌などの逐次刊

行物が多いでしょう。右手上段には軽い文庫本も置いてあります。数えたことはありませんが、凡そ一五〇〇から二〇〇〇冊はあるでしょう。

しかし実のところ研究に要する本の大半は自宅にあつて、こちらを占めるのは参照頻度の低いものばかりなんです。恐らく家には五倍以上は本があると思



★すると中でも思い入れのある資料はありますか？

前述の通り、日頃から使う本は自宅で管理していますから、コレといったものを挙げるのは難しいですね。ただ強いて言うならばなくて、南洋材といって卷子本の軸となる木、また紐とする組紐等が珍しいでしょうか。見分けるために紫檀・黒檀などの香木で標本を作ったのですが、そのものは自宅に、余ったものをこちらに置いてあります。あとは厳島組み。平家納経で使われる組紐です。この手のものは織りへの興味から収集しています。

特に書誌学では装幀、レイアウト



ト、書、紙質に着目します。加えて卷子本では表紙、紐、軸に留意しなければなりません。具体的にどうするかと言えば、ある程度時代を遡ると文献という形ではハッキリ残っていませんし、主に中国古典籍の規格・ありようから類推していくこととなります。場合によっては極々些細に見えること、例えば縫うように穴をあけた虫食い、水を被ってしまった際の染みからページを同定、かねてより散逸していた本を復元することさえ叶わぬ夢ではありません。

つまり学びには実際に見て、触れることも大切なんです。活字になったテキストを読むだけでなく、できる限り実物に近いものに接して、手ざわりで以て本を体験することも。そういった趣旨で例としてなるべく手許に集めて見るようにしています。

因みに来年五月から九月まで渡英し、大英図

書館にて在外研究を行う予定です。どうしてもそちらにしかない資料も多々ありますからね。

★他に大切にしている物、宝物は何ですか？

卒業に際してゼミ生から贈られた色紙、寄せ書きは宝物です。また何かの折にウツカリ猫が好きと口にしてしまったものだから、色紙の飾り付けは猫だらけにされてしまいました。とりわけ耳の垂れたスコティッシュフォールドが好みで、眼鏡入れやペンケースも猫モチーフのものを使っているくらいです。出先の水族館で触れ合っただけからはラッコ・カワウソなどにも弱ります。ダメですね、手をベタツとやられたらもう一目惚れです。飼っていない分よく写真を撮撮っていて、最近近所に出没するノラを観察しては我慢する日々です。

★最後に学生へ向けたメッセージをお願いします。

世界に広く目を向け、世界の文学の中で、日本文学を考えて下さい。と同時に、創設五〇周年を迎えた青山学院大学日本文学科に誇りを持って下さい。皆さんの独創的な潜在能力に期待しています。

「鬚黒大将と北の方の離縁とその意義」

▽濱中 菜摘 (中古)

『源氏物語』の真木柱巻において、玉鬘が鬚黒の妻となったことが語られる。鬚黒は北の方を様々に慰撫しようとするが、北の方の懊悩は深まり、ついに子どもたちを連れて父式部卿官邸に帰ってしまふ。この鬚黒の家庭争議は、玉鬘物語の決着が引き起こした余波である。

『源氏物語』真木柱巻における鬚黒大将と北の方の離縁は、これまで様々な観点から論じられてきたが、未解決の問題も多い。多くの先行研究で、鬚黒は元々北の方との離縁を望んでいたという理解が唱えられ、定説となっているが、これは誤った解釈である。この説の論拠として引用される胡蝶・藤袴巻の一節は、鬚黒と距離をおいた人物・語り手による推測・噂に過ぎず、鬚黒の本心を語るものではない。離縁の決定打となるのは物の怪による北の方の

狂乱だが、その存在自体は玉鬘との婚姻以前からの「例の」ものであり、今まで通りの形ばかりの結婚生活を送る上では支障とならない。火取の灰をかけられたことで、両者の北の方の病に対する認識が、ただ物の怪のせいというだけでなく、彼女自身の心が深く関わっているのでは、という疑念に変化したことこそが、二人の離縁を決定的なものとしたのである。

この前妻の苦悩の物語は第二部の紫の上へと引き継がれていく。紫の上は鬚黒の北の方と同じく式部卿官の娘であり、女三の宮の降嫁によって、光源氏の第一の妻という立場が揺らぐことになる。鬚黒の北の方の位置は、第二部の紫の上の位置に重なる。若菜下巻にて北の方が再度物語に浮上するのは、真木柱巻から続くこの物語の主題を深化させる狙いによる。修士論文では、上記の離縁が第二部の物語に与えた影響について、更に詳しく掘り下げ論じていく。

『源氏物語』における六条院の四季と人物呼称について

▽鈴木 祐佳 (中古)

『源氏物語』における人物呼称

は、物語の場面や語り手の視点と密接に関わっている。そのため、人物呼称に着目することで、『源氏物語』をこれまでの研究と異なった角度から読むことができるのではないかと考えた。

光源氏は「少女」の巻での六条院落成に伴い、四季を冠する四町にそれぞれ女君を据える。女性の呼称は住む場所に影響されることが多く、四町に据えられた女君たちも当然「春の上」や「夏の御方」など、四季を冠した呼称で描写されている場面がある。しかし冬の町の明石の君が「冬」の呼称で描写される場面は一例限りであり、秋の町の秋好中宮は「秋」の呼称で呼ばれることはない。その上、『源氏物語』の本文において、四町の四季性が描かれている場合と、四季を冠した人物呼称が使われている場面は一致しないのである。

六条院構想は紫の上と秋好中宮の春秋論に端を発するという高橋和夫氏の研究を始めとし、春秋が六条院の四季の町における中心であるという研究がこれまでに多く発表されている。一方で、正月に光源氏が四町を巡る場面などでは、

描写の描かれ方にそれほど偏重はない。これは物語作者が、六条院という空間としての四方四季と、女君たちの力関係を決定する呼称としての四季を、同列に考えていないからなのではないかと指摘した。

女君たちは、四季の町それぞれに居所を与えられ、四つの季節と密接に関わる人物造型がなされているが、その力関係は対等ではない。女君たちの関係構図を明確化するための季節的属性の付与という観点から、問題をとらえ直す必要があると考える。

「坂口安吾、単行本『夜長姫と耳男』論」

▽内村 文紀 (近代)

坂口安吾の『夜長姫と耳男』(※作品タイトルではなく、単行本のタイトル)について論文を書く予定である。まず概観として、論文題目、論文の目的、論文内容の概略、枚数内訳を述べた。次いで、当時の安吾は単行本化を断っていたことについて、『夜長姫と耳男』は「安吾捕物帖」のような連作短編ではないにもかかわらず、また印税を差し押さえられる

可能性を覚悟してまで、安吾が『夜長姫と耳男』を出版した理由とは何かという疑問を提示した。「収録が発表順ではない」ことについては、収録順に意味をもたせることの例として冬目景の漫画『空中庭園の人々』を例に出し、作品内容はもちろんだが、それが入っている器である「本そのもの」も考察する必要があるのではないかと主張した。一方、「本文異同考察の一例」として、『夜長姫と耳男』を例に出して説明し、他の収録作品にも非常に多くの本文異同があるが、これまではこれらの異同が作品単体でしか検討されてきていなかったことへの懐疑（とはいっても『夜長姫と耳男』以外には論文自体がほほえないが）を述べ、より広い視野から検討する必要があるのではないかという方向性を示した。

それらいずれもの研究史における見落としの穴が、この「異本」たる『夜長姫と耳男』を考察することで埋められるのではないだろうかと述べ、今後の安吾研究の可能性についての見直しを述べた。



二〇一六年度講義題目

〈大学院〉

上代文学研究(一)

外から見た日本文化・日本文学

矢嶋 泉

上代文学演習(二)

「書流」の研究／「書苑」を読む

小松 靖彦

中古文学演習(一)

『源氏物語』梅枝巻を読む

土方 洋一

中世文学研究(二)

『長短抄』研究

廣木 一人

中世文学演習(一)

延慶本『平家物語』の輪読

佐伯 眞一

近世文学演習(二)

富山大学蔵『新撰百物語』を読む

篠原 進

近代文学演習(二)

日本近代文学における雑誌メ

ディアの研究

掛野 剛史

近代文学演習(三)

近代・現代文学、文化、思想の

研究方法

佐藤 泉

近代文学研究(一)

査読あり、の論文完成

片山 宏行

近代文学研究(三)

夏目漱石『文学論』研究

山口 政幸

韻文学研究

『中書王御詠』の注釈

中川 博夫

劇文学研究

「劇文学」の世界を多角的に知

る

日本語学研究(二)

文法論と語用論の研究法

澤田 淳

日本語学演習(一)

最新の文法を研究

近藤 泰弘

日本語教育学研究

漢語接辞の研究

山下 喜代

中国古典学演習A

司馬遷の『史記』を読む

遠藤 星希

〈学部〉

文学研究法

作品を読むために

矢嶋 泉

文学テキストの扱い方

佐伯 眞一

文学研究の基礎を身につける

土方 洋一

日本文学研究のための基礎知識・

能力の養成

廣木 一人

日本文学史

上代・中古文学史

矢嶋 泉

中世文学史

佐伯 眞一

江戸時代の版本の書誌学

二又 淳

近代文学史

佐藤 泉

古典文学概論

江戸文学を通して「古典」の理解

を深める

大屋 多詠子

大木 京子

近代文学概論

日本近代文学について

片山 宏行

漢文学概論

先秦・漢・魏・晋・南北朝時代の

「文学」作品について

遠藤 星希

日本語日本文学情報処理法

日本文学・日本語学研究に必要な

情報処理の基礎

須永 哲夫

日本語学概論

日本語の仕組みを学習する

近藤 泰弘

日本語史

日本語の歴史を考察する

澤田 淳

表象文化研究概論

「近代日本における恋愛と結婚」

の表象

鈴木 貴宇

「日本文学」を通じて、日本の言語・

文学・文化を考察する

小松 靖彦

文学交流入門

日本文学を「文学交流」の視点か

ら展望する

小松 靖彦

日本文化文学入門

日本文学を専門的に学ぶ外国人が

必要とする基本的な日本語・日

本文学・日本社会・文化・日本

人の一般思想について

廣木 一人

日本文学演習

『萬葉集』の美とその翻訳

小松 靖彦

最新のテキストで読む『古事記』

矢嶋 泉

『蜻蛉日記』を読む

吉野 瑞恵

『源氏物語』 柏木巻精読

土方 洋一

『枕草子』を通して平安朝文学の特徴を理解する

津島 知明

『百人一首』の読解

中川 博夫

『新古今和歌集』研究

廣木 一人

『平家物語』を読む

佐伯 眞一

『今昔物語集』を読む

目黒 将史

『徒然草』の読解

佐藤 智広

ベストセラーを作ろう

篠原 進

『化物大江山』を読む

大屋 多詠子

『親敵討腹鼓』を読む

藤井 史果

『奥の細道』を読む

金子 俊之

『国性爺合戦』を読む

佐藤 かつら

『堀川波鼓』を読む

西野入 篤男

近代文学研究のための発表

片山 宏行

日本の近代文学作品の方法の継承について

村上 克尚

大正期の短篇小説を取り上げ、「文学」を研究的に読む

掛野 剛史

志賀直哉のすぐれた短編作品と夏目漱石『坊っちゃん』を読む

三浦綾子『塩狩峠』を読む

市川 浩昭

松本清張『眼の壁』を読む

山口 政幸

村上春樹『女のいない男たち』を読む

大正から昭和初期、戦後の評論

佐藤 泉

翻訳演習

日本文学や日本文化の英訳と日本語原文との比較検証および再翻訳

緑川 眞知子

中国古典文学演習

『唐詩選』を読む

遠藤 星希

中国文学・思想演習

『礼記』楽記篇を鄭玄注にしたがって読む

和久 希

文学交流演習

異国の文化・文学がぶつかった時に何が生じるのかを捉える

西野入 篤男

日本語学演習

日本語のコンピュータ処理の概要

近藤 泰弘

日本語の語用論・談話研究

澤田 淳

日本語の特徴を明らかにする

奥田 芳和

日本語学研究の方法論全般

近藤 泰弘

日本語・日本語教育演習

日常使用している言語について、地理的・社会的観点から考えるための基礎的な力を養う

鎌水 兼貴

日本文学講読

手塚治虫研究

土方 洋一

古典で読み解く中世の鎌倉

佐藤 智広

明治以降の小説、詩歌、演劇映画などに関する読解

市川 浩昭

中国古典文学講読

『論語』を読む

樋口 泰裕

日本語学講読

敬語に関して幅広く学ぶ

奥田 芳和

書道の歴史と実技

中国書道史と実技

大橋 修一

書の基礎知識及び技術を身につける

金子 馨

書理論

各時代における「書」の考察

加藤 詩乃

日本語教育概論

日本語教育の現状や内容について理解を深める

山下 喜代

日本語教授法

日本語初級教科書の教材分析と模擬授業を通して、初級の学習項目の把握と指導法の理解、基本的な教授能力を習得する

川端 芳子

特別演習

『萬葉集』・書物学・文学交流の研究方法

小松 靖彦

卒業論文作成指導

矢嶋 泉

平安時代の文学、またはそれに關する対象を扱う卒業論文の指導

土方 洋一

卒業論文作成指導

高田 祐彦

卒業論文作成指導

佐伯 眞一

卒業論文作成指導

佐伯 眞一

中世・近世の韻文学

廣木 一人

日本語教育演習B

日本語教育で扱う文法項目のレ

主に近世文学

篠原 進

ポートの作成

中・上級の教材作成と模擬授業

近世後期の文学

大屋 多詠子

日本文学特講

『古事記』が和文で書かれた事情

卒業論文作成指導

片山 宏行

を考える

矢嶋 泉

漢文学に関する論文作成

近代・現代の文化、文学、思想に

関する論文作成

日本語学の卒業論文の書き方

近藤 泰弘

『源氏物語』成立論

土方 洋一

日本語学関連をテーマとした卒業

論文作成指導

澤田 淳

連歌についての理解

廣木 一人

アジアの中の日本の説話

日本語教育や日本語に関する卒業

論文作成指導

山下 喜代

近世文学を多角的に掘り起こし、

理解する

日本語教育演習A

「日本語会話クラス」の開設を想

定としたグループワーク

日本語教育研究法の学習と研究レ

ポートの作成

山下 喜代

江戸文学における笑い

大屋 多詠子

菊池寛「話の屑籠」の評釈を行い、

同時代の世相・文学について考

察する

片山 宏行

文学作品を通して、近現代社会の

規律、管理の在り方を理解する

佐藤 泉

文学理論と作品分析

村上 克尚

文学交流特講

日本古典詩歌の翻訳による「文学

交流」／戦争と文学交流

小松 靖彦

日本文学とアジア

『三國演義』『水滸伝』『西遊記』『金

瓶梅』の享受

神田 正行

日本文学とアメリカ・ヨーロッパ

西欧における日本文学の受容

畑中 千晶

表象文化論

演劇作品と日本文学との関係を考

察する

説話・芸術論・物語文学で読む書・

香・画の世界象

松岡 智之

日本文学特講A (集中講義)

日本近世の政治思想と生活文化

ROBERTS, L. S.

中国文学・思想特講

『礼記』楽記篇を鄭玄注にしたがっ

て読む

和久 希

中国古典文学特講

東晋の詩人陶淵明の伝記、作品を

読む

樋口 泰裕

日本語学特講

日本語研究の枠組みを超えるため

の方法論の提示

近藤 泰弘

対照研究と言語類型論から見た日

本語

澤田 淳

言語の変異について考える

日本語教育特講

日本語「文法」の指導内容と教材

化について

日本語「語彙」の指導内容と教材

化について

山下 喜代

日本語教育実習

「短期集中日本語会話クラス」の

開講準備、授業実施、事後評

価活動

山下 喜代

日本文学研究のための英語

日本文学を専攻する学生が、英語

で書かれた日本文学・文化論を

正確に理解し、自ら英語で発信

する能力を養成する

福田 武史

音声表現法

思っていることをわかりやすく、

的確に表現する方法について

文章表現法

文章技術の向上を目指す

坂本 充

木村 寛子

〔研究室だより〕

*二〇一六年度三月の卒業生は二二二名、四月入学生は一三五名でした。大学院前期課程三月修了生は三名、四月入学生は三名、後期課程の四月入学生は三名でした。

*二〇一六年度から新たに非常勤講師として、今井克佳、掛野剛史、加藤詩乃、加納留美子、神田正行、佐藤かつら、高橋裕子、竹内直也、田中草大、中村亜美、根岸理子、二又淳、帆苺基生、松岡智之、村上克尚、日黒将史、森幸穂、山口真紀、山本直美、吉野瑞恵、ルーク・ロバーツの諸先生方にご尽力いただきました。

*二〇一六年度は、佐藤泉教授が学科主任を務められました。
*二〇一六年度は高田祐彦教授が内地留学（東京大学）のため休講なさいました。また、日置俊次教授が在外留学（台湾大学）のため休講なさいました。

*二〇一六年度日本文学大会（春季）・講演会・総会が五月二十一日に青山キャンパス、十四号館大会議室で開催されました。講演会については本会報

五頁をご覧ください。

*二〇一六年度日本文学大会（秋季）・講演会が九月二十二日に青山キャンパス十七号館本多記念国際会議場で開催されました。講演会については本会報7頁をご覧ください。

*岩田麻莉子さん、納谷麻実さんが退任され、四月から後任として高橋みのりさんが、六月から細野愛子さんが副手に着任されました。

〔編集後記〕

本年度は文学部日本文学が創設されてから五〇周年の、記念すべき年となりました。そこで教員、卒業生、大学院生、学部生が一体となり、九月二十二日に日本文学創設五〇周年を祝う会を企画し、実行しました。祝う会は祝賀式典、浅田次郎氏による講演会、卒業生と在学生による記念シンポジウムの三部構成で行われました。その詳細については会報本文をご参照いただきたいのですが、会場は満員御礼で非常に実りのある会となり、約半年間学部生として準備に関われたことの達成感を得ると共に、これからの日本文学科

のためまぬ発展を予感しました。

そして昨年に引き続き、ゼミ紹介を今年度も行いました。ゼミ紹介とは、二年生以上の学生が一年生に、自分の履修している演習科目を紹介するというものです。ゼミ生側、一年生側の双方とも、昨年度に比べて多くの人数を動員することに成功し、年二回開催の日文大会と共に、日本文学科の行事として定着しつつある感触を得ました。学科とその学生に資するべく、来年度以降も続けていけたらと思います。

今回の会報には、創設五〇周年に関連した特集記事も複数組み込まれており、内容の濃いものとなったのではないかと思います。

す。

最後となりますが、今回会報の編集や日本文学科創設五〇周年を祝う会の準備に携われたことは、非常に大きな経験となりました。それと同時に、これらを完成・成功させることができたことを大変嬉しく思い、ご協力頂いた皆様には、この場をもつて感謝の意を表したいと思います。

編集委員

教員

土方 洋一 澤田 淳

学部二年生

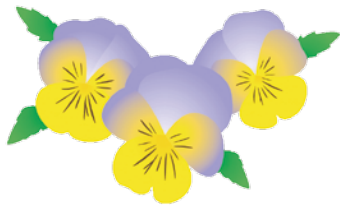
伊藤 幸名 重久 理奈

朝山 麻衣子 北住 悠

星野 日菜子

学部一年生

石河 純花 伊藤 遥



会報 第五十一号

二〇一七年三月一七日 発行

〒150-8366 渋谷区渋谷四一四―二五

青山学院大学総研ビル10F

日本文学科研究室内

編集 青山学院大学日本文学会

電話 (03)3409-7917

FAX (03)3409-1800